

「現代人の救ひ」といふこととして読む。

はじめに

評論集 全七巻のうち、第四巻「日本および日本人」の後書、戦後、昭和二十四年までに刊行された四冊の評論集について、その特徴を解説してゐる。

各巻の要点

へ第一節へ

表題の「現代人の救ひ」といふテーマは、編集者から与へられたもの様だ。恒存自身が、自ら選んだものではなからぬ。課題そのものに、まづ反撥を示す。この様な課題で論ずる當時の論壇の風潮を批判することか、恒存の内的課題だったのだらう。

ヨーロッパ人と同じ歴史的課題を擔ふものとして、ほくたろ自身を位置づける。

← 他人の問題にまへめりに没入することにより、ほくたろ自身の過去と現在とから、そしてその兩者の結ぶつたといふ努力から、面をそむけようとしてゐる。

← 恒存の解答は、「救はるべきいかなる地獄をもまたぬ」

へ第二節へ

物質的に還元せしめられいかなる精神的苦悩も存在しなければ、政治によつて解決しえぬいかなる文藝的領域もありえぬ。

← 文藝とは、あらゆる藝術は苦悩の美化した、苦悩にスタイルを與へることだ。

← この人の世は、なんで生まれるかあるものか
自我は、信すべし、なんら、真実性をもつてゐない。

ヨーロッパのリアリズムの文學が立つてみた地盤

かれらのねらひは、よりよき世界に一步近づくことではない。
完全なる世界を一拳に獲得するか、それができなかったら
自分の苦痛のうちにこそ一歩でも動かうとはせず、苦悩の人生を
苦悩の人生において、醜惡を醜惡のまゝに描かうとした。

へ第三サ節

ヨーロッパのリアリストたるの創作方法

刻明に他我を、現實を、描き出すことへの情熱が

自我の人間の慾求に根ざしてゐるとすれば、

日本の文學者たるは、とまどひせざるを得ぬと言へる。

さらに實證主義は、近代ヨーロッパに自我の平極さと無内容と
おもひ知らせた。その近代自我に幻滅と絶望とを感じたと
すれば、彼らの夢想してゐる自我の内容の高さと深さがあつた
かると言はざるを得ぬ。

十九世紀末まで現代にかけて、かれらの精神が、現代人の救ひを
求めつつ漂泊をつづけてゐるとすれば、それは實證主義が
かれらの自我のうちに追放した神に、型とれる人間の概
念の探求でなくしてゐるであらうか。

あるかへつて、日本の文學者は、

救ひは絶望を前提とするか、絶望の深刻さをみせられる
ほど、強烈な苦痛も理想も、もつてはゐない。

←

真に絶望しえぬ悲しみは、神をもたず、苦痛をも、もてえぬ
ことにならざる。絶望にはほかあるまい。
それは、戦後において、ぼくたちの口へん言葉をつくりだした自意識の
要求であり、この自意識が、無意識に救ひを求めはじめゐる。

現代日本人としては、

救ひを求める絶望の悲しさを身におぼえつつ、しかも

この悲しむに、安住し、倚りかかることは許されぬ。

へ第四サ節

二元論の提出

- ・文學と政治・救ひを必要とする人と必要とせぬ人
- ・救ひを必要とする道徳と必要としない道徳

日本人の悲しむべき二元論の宿命は、絶対性、政治、側から
社会革命の側から解決されてゆかねばならぬ
文學に手をふけるなかれ。

と奥に救ひの懇求あるものにのみ救ひを叫ばしめよ

この火のしをあらうのつべり引き伸ばされた心理のぼくづを
手にして泣くにも泣かれぬ悲面をつくるかいいのだ。
文學も小説もリアリでもみんないふれかゝる話な
そのときこそ、ぼくたちははじめて救ひを求め、神が欲しくする
か、そのときこそ、ぼくたちの唇に、いかなる神の
名が浮ぶといふのか。

讀後感

『全集』ではハベージしかない、短い評論である。かつて知人の
國語教師の恒存の文章が、高校の教科書に載るこ
のは遺憾であると言つてゐたが、もしこの短編の教材
にならう、とうだろう。私は、目録から、自らの讀解力の
不足を自覺するが故に、まるで教材に対する生徒の
如き態度で音讀し、意味を確認しつつ讀んで
ゐるのだが、この文章は、表現のどうも回りくどいと
感じた。恒存自身も「はじめに」で紹介した後書で
「措辞・文體・論理、いつも未熟で、私にとって恥ぢ
さうである」と表現してゐるが、この文章にもそれか
あらはまる様に見える。教科書には載せたくない、しかし、
魁うめな表現、印象的な表現は、いつかある。特に最後の
段落の後半と結びの一文、「のつべり引き伸ばされた心理の
ぼくづ」といふ表現も、あまりに、私にぴたりする様で、
苦笑してしまつた。「救ひを必要としない人」に、私も分類され
るのにちかひない。恒存の文章は、目録とくにも見られる
自己欺瞞を、明るみにさらしてくれるのか、いい。他人事では
なく、私自身のそれをも、また、この評論で最も重要な
表現は、近代ヨーロッパの「精神の漂泊」の如く
神に型とれる人間、概念の探究であるといふ。二つの部分
部分だらう。欧米を「理解する」といふ、土、ついでである。